

中国四川省宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

THE RELATIONSHIP BETWEEN THE WHITE SPIRIT INDUSTRY
MODERNIZATION AND THE CITY FORMATION IN YIBIN, CHINA

曾天然*, 藤川昌樹**

Tianran ZENG and Masaki FUJIKAWA

This is a follow-up research of the company town, Luzhou. Comparing with the dominant role played by the white spirit industry in Luzhou during the modernization process, the influence of the brewing company within Yibin's modernization is evaluated as moderate. This paper analyzed the relationship between the modernization of the brewing industry and Yibin's urbanization process. The conclusion is that a separated industrial space has been formed within the city, therefore, the spatial structure of Yibin can be classified as "A City Within A City".

Keywords : City formation, Company town, Traditional industries, Wuliangye

都市形成, 企業城下町, 伝統産業, 五糧液

1 はじめに

中国は近年、極めて早いスピードで都市化プロセスを歩んでいる。国連の「世界都市化展望 2009 年修正報告」によると、1980 年頃からの中国の都市化成長スピードは世界で最も早いという。都市化を促す原動力は工業化であり、中国の都市形成を紐解くためには、「企業」と「都市」の関係を解明することがとても重要であろう。

中国において企業の成長などは経済システムや国の政策などに大きく影響されている。1860、70 年から民族資本主義が芽ばえはじめ、戦争などの中でも、中華民国の中後期までは苦しみながらも確実に発展していた。その後 1949 年に中華人民共和国が成立したが、建国直前の内戦などの影響で、社会、経済が極めて不安定であり、殆どの産業が破滅寸前の状態にまでなってしまった。その状況下で計画経済が実施され、一定規模の産業が国有化されることが多かった。しかしこの時期の経済システムには欠陥が存在し、加えて文化大革命などの影響も大きく、産業の発展が緩慢であった。1980 年頃から改革開放政策が実施され、経済システムにも徐々に市場経済へと変化していく。産業発展の恩恵を受け、都市建設も加速している。この時期でも都市と産業に関して国が幾つかの重大な政策を発表・実施している。主な政策としては 90 年代からの国有会社の経営制度改革と上場させる政策、2000 年頃からの「三農問題」(新農村など)に関する政策、5 年ごとに制定される産業部門バランス調整計画、そして近年になってよく見られる産業クラスターと特色のある産業集中発展エリアの発展戦略などがある。

前述したような社会状況の中で、中国では建国初期から国の基礎を建設するために多くの工業都市が開発され、現在に至っては実力

のある企業も多数存在しているが、日本のような「企業都市」、または「企業城下町」の概念は未だに普及していない。その原因は上で述べたように中国において多くの大会社が国有会社であり、自治体と企業の関係性が複雑であるからと考えられる。

また中国は改革開放から既に 30 年以上経ち、中国の経済と都市化は高度成長からブレーキをかけつつある段階に入ったが、中国の都市形成や産業近代化に関する学説は殆ど提出されず、両者の関係性を検討した研究も少ない。この段階でこれをテーマとした研究は大きな意義を持つと考えられる。

そして、新中国成立前から一定の規模を持ち、経済システムや政策の変化などに敏感に反応し、都市の歴史文化や周辺地域で営まれる農業などにも関わりが深い中国の代表的な伝統産業である白酒醸造業は分析事例として優れていると判断される。

本稿は以前筆者らが発表した「中国四川省瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係」¹⁾(以下、「前稿」)に引き続き、中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係を議論する。対象地である宜賓市も瀘州と同様に前近代から酒造業が発達していた都市であった。

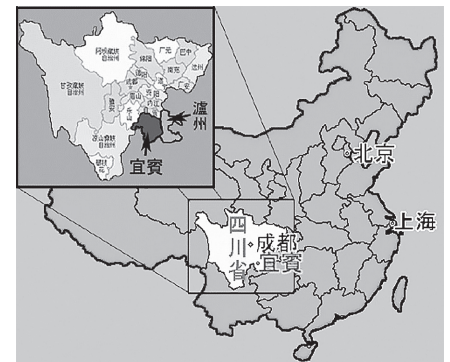


図1 宜賓市の位置

* 華南理工大学建築学院 博士研究員
筑波大学院システム情報工学研究科 博士(工学)

** 筑波大学システム情報系 教授・博士(工学)

Postdoc, School of Architecture, South China Univ. of Technology
The Univ. of Tsukuba, Dr.Eng.

Prof. Faculty of P.P.S., Univ. of Tsukuba, Dr.Eng.

前近代からの酒造工場の窖が現代までずっと使い続けられ、都市形成に大きな影響を与えている点も共通している。昔の酒造工場が一つに統合され、建ち上げられた国有会社「四川省宜賓五粮液グループ株式会社」(以下、「五粮液会社」)は現在白酒市場で「国酒」の異名を持つ茅台酒を生産する茅台会社と一二を争う大企業であり、海外の知名度も高い。また都市自体は瀘州より工業都市の性格が強く、酒造業と都市の関係をより深く理解するために適した対象と言える。

先行研究としては中国での産業と都市形成との関係について検討したもの、白酒醸造業の概要と空間分布の特徴を述べたものは幾つか存在するが、本稿のように伝統産業と都市の関係を主に空間的側面より解明しようとするものはほぼない。日本では企業城下町に関する研究などがあるが、国と業種の違いにより、本稿で取り上げる宜賓とは多くの相違がある。また具体的な先行研究紹介は前稿で既に行っており、本稿では省略する。

宜賓については概説として『宜賓市志』³⁾(以下、『市志』)が上梓されているほか、五粮液会社では会社の歴史や発展状況などについて『五粮液志』を出版している。その他、宜賓市の酒文化について『宜賓酒文化史』などの本もある。しかし、宜賓の全体の酒造業を空間的に分析する研究と宜賓の都市についての詳しい研究は共に少ない。都市と産業を広い視点で結びつけ分析を行う研究が必要だと考えられる。

本稿では清代から現代にかけての宜賓の都市空間や社会に関する状況を、主に各時期の地図や計画図、『市志』や文献史料を用いて分析する。また、酒造業については『五粮液志』を参考にしつつ、会社へのヒヤリングで得た情報、『市志』や他の文献史料などを元に、現地調査での知見を加える。そして、産業と都市の結びつき方のメカニズムとその変容を、主に都市空間の観点から分析した上で、前稿の対象地である瀘州と比較し、酒造業の近代化と都市形成の関係の更なる知見を得ることを目的とする。

分析の時代区分としては比較しやすいように前稿と同じく中国の経済システムの相違に基づき、市場経済萌芽期(～1949年)、計画経済時期(1949～1980年)、市場経済時期(1980～現在)の3つの時期にまず分ける。そして特に市場経済時期については酒造会社の発展段階を参照し、更に市場経済過渡期(1980～1994年)、市場経済適応期(1994～2006)、市場経済進展期(2006年～現在)の3つの時期に分

表1 データから見る現在の

白酒業界 Top3 の酒造会社と所在都市の関係性強度評価表^{注1)}

都市名	瀘州市	宜賓市	茅台鎮
会社名	瀘州老窖株式会社	宜賓五粮液株式会社	貴州茅台株式会社
会社の資産総額(億元)	131.71	464.09	658.73
会社営業収益と都市のGDPとの割合(%)	53.53/1,259.73 ≒4.25%	210.11/1,443.81 ≒14.55%	315.74/350.00 ≒90.21%
従業員数と都市の市区人口との割合(%)	0.19/101 ≒0.19%	2.63/89 ≒2.96%	1.68/4.2 ≒40%
社有地と都市の主な市街地面積との割合(%)	312.26/3,523.45 ≒8.86%	1,004.67/3,419.79 ≒29.38%	265.60/365.25 ≒72.72%
会社と都市の関係性強度の評価	軽度	中度	重度

けることとする。

2 中国の白酒醸造業業界 Top3 の酒造会社と都市の関係性強度

宜賓の白酒醸造業の近代化と都市形成の関係について具体的な分析を行う前に、まずは対象地が中国の酒造業が発達している都市の中で、どういう位置付けになっているのか簡単に分析しておこう。現在中国白酒醸造業の Top3 の酒造会社は 1.本稿の対象地にある五粮液会社、2.「国酒」の異名を持ち、中国政府が外国からの賓客を接待する酒として選ばれている酒を生産している貴州茅台会社と 3.前稿の中で登場した老窖会社の 3 社とするのが一般的である^{注2)}。この3社は業界から見ればとりわけ実力のある会社であると言えるが、会社の産業規模や資本規模などと都市の経済、人口などに違いがあり、その違いによって会社と都市の各方面の繋がり、いわゆる「関係性」の強度に相違が生じていると考えられる。表1で示した通り、都市と企業の「関係性」を評価するために、企業と都市の各種データを割合で示した指標を導入した。そしてこのデータにおいては、瀘州の各割合のデータは最も低く、茅台においては各割合のデータが最も高い。その割合も茅台では 90%や 72%など極端な数字になっていることがわかる。これらデータを参考にし、現在の中国の白酒醸造業業界 Top3 の酒造会社と都市の関係性強度を、老窖会社と瀘州市では「軽度」と、五粮液会社と宜賓市では「中度」、茅台会社と茅台鎮では「重度」と評価できる。

それではデータ評価で会社と都市の関係性強度が「中度」にあたる宜賓では、この関係性強度が如何なる原因で変化し現在に至ったのか、そして如何なる形で宜賓の産業・都市空間構造に影響を与えているかを、時代を遡って分析してみよう。

3 市場経済萌芽期(-1949年)の酒造業の変化と都市形成

宜賓は長江の一番上流の都市であり、古くから戦乱が続いていた。街区状況と酒造業の立地について、清以前の地図史料はほとんど存在せず、酒造工場も基本的に明から出現したものであるため、清時代から分析を行う。

図2を見てみると、宜賓城の立地が分かる。三面に川、一面に山がある半島上に都市が建設されていた。北、東、南面の城壁は直接川に接して建つこともなく、ある程度の距離を隔てている。他の中国の前近代県城都市と同様に全体的に閉鎖的な構造になっていた。西門、北門の外には更に月城が設けられ、小南門の西側にも護城が

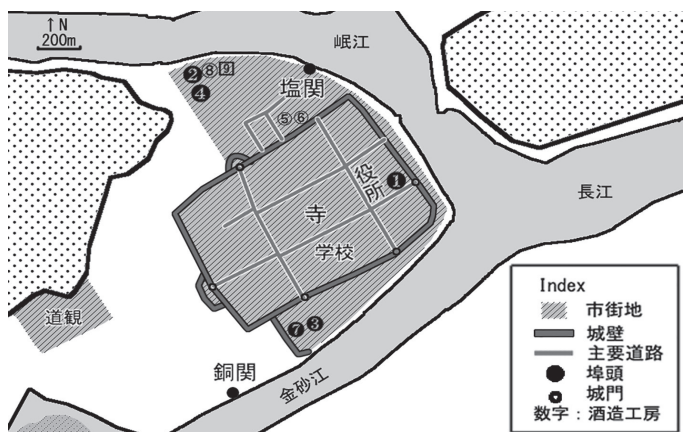


図2 清時期宜賓市街地復元図^{注3)}



図3 民国時期 宜賓市街地復原図(1948年)注4)

表2 宜賓前近代酒造工房一覧表注5)

番号	工房名称	民国期 工房所在地	現在 工場 所在地	民国期 店舗所在地	窖の 数	窖の 建造年代
1	長發生	鼓樓街 32号	鼓樓街	工場場所と 同じ	16	明、清
2	利川永	順河街 144号	濱江路	工場場所と 同じ	13	明、清
3	德勝福	走碼頭 88号	上走馬街 (現存せず)	工場場所と 同じ	8	明、清
4	劉鼎新	外北正街 195号	北正街	工場場所と 同じ	14	清
5	鐘三和	東濠街	東浩街	小北街13号	11	清
6	張萬和	東濠街	東浩街	小北街63号 北正街27号	10	清
7	趙元兴	走碼頭 87号	上走馬街 (現存せず)	走碼頭87号 南街6号	7	清
8	全恒昌	順河街	濱江路	外南街27号	7	清
9	聽月樓	順河街	濱江路	-	6	清
10	萬利源 長	馬家巷	長春街	下北街52号	10	民国中後期
11	廣大	南街	南街	-	6	民国中後期
12	天賜福	順河街	濱江路	-	6	民国中後期
13	吉慶	外北正街	北正街	-	4	民国中後期
14	吉鑫公	文星街	文星街	-	3	民国中後期

作られた。西からの攻撃に対し守りを固めていたと考えられる。城内については中心部に学校などの施設が設けられ、役所は東門の付近に設置されていた。船着き場は、『叙州府志』の記述によると銅関と塩関の付近に2ヶ所設置されたという。船着き場のある方向に面した城門はなく、船着き場と城門の間にもう一層の城壁があって二重に隔てているような構造になっていた。この構造も防御を重視していたと考えられる。

市街地については城の範囲内以外は北と東の方に広がっていた。西の方の翠屏山の一部である真武山には現在「真武山道教建築群」注6)と呼ばれる幾つかの道観があり、小規模な市街地を形成していた。道に関しては、『宜賓街区図志』の記載によると宜賓城は明洪武6年(1373年)に石の城壁が作られ、道路も大規模な改修が行われた。道の基本的な形は「井」字型であり、道幅は4丈(約13m)であった注7)。図2の「主要道路」で示した通りの道であると考えられる。

酒造工房は、『五糧液志』の記載によると、専門化した酒造工房が明代から出現した。表2の工房1-3は明代からの工房だが、設立当時3つの工房の窖の数は合計して10口ほどであったという注8)。専門化した酒造工房の出現時期は瀘州と同じ頃だが、規模は比較的小

さい(前稿で述べたように同時期瀘州で出現した酒造工房は10口以上窖を持ったものが多い)。そして清代になると、表2で示した通りに1-9番の計9軒の酒造工房に増えるが、注目すべきなのは工房1の長發生工房である。図2でもわかるように長發生工房は城内の役所の隣に建っていた。工房の工房主は叙州府(当時の宜賓一帯の地名)の通判(食糧運送、水利などの事務を管理する役職名)の尹氏であった。この工房の規模は大きく、当時中国西南地区で一番生産量が大きく、名の通った工房であったという。また長發生工房が生産した酒は一般販売や移出販売だけではなく、宮廷への貢ぎ物としても提供されていた。当時の長發生工房建物は2階建てのもので、3つの入り口があり、街道に面した部屋は9つ、その中の5つは店舗であった注9)。この記述と現在の改修された長發生工房の建物から見ると、長發生工房は宜賓城の一番の中心街路である鼓樓街に接して立地し、広い面積の店舗を設けて、酒を製造販売したことがわかる。

民国時期の宜賓では、瀘州と同様に日中戦争や内戦の影響で防衛線が内陸部に後退したことによる商業活発化の影響を受け、市街地が変化した。まず城壁について、図3からわかるように1948年頃には東と北の全部、そして南の一部の城壁が撤去され、より開放的になっていた。市街地に関しては城の北、そして西にも大規模な市街地が展開していた。1948年頃には宜賓半島の東はほぼ全部市街化されていた様子が見られる。基本的な「井」字型の道路は中山街、下北街、東街、小北街(1943年頃の道路名)という明清期からの名称を受け継いだ道路だが、図3では中正路、林森路のような「OO路」と名称変更したものがあり、道路に関する整備が行われたことが窺われる。そしてこの「井」字型の道路は北と西に延ばされ、城外の市街地の主要道路になっていたことも分かる。

酒造業については、表2を見ると、酒造工房が14軒に増えていたことがわかる。そして清時代に規模が大きかった1番の長發生工房は依然他の工房と比べて高い地位にあったと推測できる。民国期にこの工房を経営していたのは尹氏の14代目の尹伯明で、当時宜賓商会の常務理事、四川商業連合会の理事を勤めていた。地方の商業界を動かせる立場であった。長發生工房の周辺には5、6番の酒造工房の店舗が設置されていたこともわかる(図3の(5)、(6))。5、6番の工房は北の城壁外にある街区東濠街付近にあった(同(5)、(6))。両方とも10口程度の窖を持ち、生産規模が比較的大きな工房であった。しかし東濠街付近はそれほど商業が盛んではなかったため城内に出店したと考えられる。城内では南街付近にも一つの酒造工房と一つの酒販店舗があった(同(7)、(8))。民国以前に城内で酒を生産していたのは長發生工房しかなかったが、民国期になって11番の工房が作られた。ただし、窖の数から見て規模は比較的小さい。これに対し、城外では先ず岷江の川沿いに幾つかの酒造工房が集中していた。比較的古く、規模の大きい2番と4番では工房と共に店舗も開かれていた(同(2)、(4))。10番など人の行き来が比較的小さい場所に建つ工房は主要道路に店を開いていた。また、埠頭と茶館、食堂に近かったからか、9、12、13、14番などは『五糧液志』によると特に店舗を開いていなかったとみられる(同(9)、(12)、(13)、(14))。南側にある金沙江の川沿いには3番と7番の酒造工房があった(同(3)、(7))。両方とも工房と店舗は同じ場所に開設されていたが、7番は城内にも出店していた(同(7))。

全体として見ると、古い工房は基本的には工房と店舗が一体であ

った(「前店後場」形式)。その後は工房と店舗が分離する販売方式の工房が出現し、更に店舗を持っていない工房が出現した。そして川沿いで酒を生産する酒造工房が増加した。原因としては、宜賓の城内の井戸水が塩、硝などを含んでおり、酒の生産には向いてなかったからと言われている。酒造りには川の水を用いていた。岷江の水は金沙江と比べて、増水期に水が濁る期間が短く、酒造りにより向いているため、多くの酒造工房は岷江の川沿いに立地した。明から清までの長い間、城内で酒を生産していたのは長發生工房のみであった。『五粮液志』によるとこの工房も川の水を使って酒を生産したが、前述した経営者の背景から考えるとこの工房は特別に城内での立地を認められた可能性がある。一方、金沙江側の工房数が少ないのは走馬街の商業が盛んになった時期が早く、会館などが多数存在したことから、民国以降に新しい工房を作るのが困難であったのも原因だと考えられる。店舗を持っていない工房の出現は水運の発展と会館、茶館などの増加により搬出と会館などに酒を供給するだけで経営が成り立つようになったのが理由だと考えられる。

全国的に見て、当時の宜賓酒造業はある程度名が通っていたが、都市に大きな影響を与える程の規模には至ってなかったと考えられる。表2を参照すると当時から現在に残された窖は合計113口ある。勿論その後の生産状況や保存状態にも影響され、実際には民国時期の窖の数はこの数字より多いであろう。しかし当時の生産量全国一である瀘州の合計1617口と比べると、産業規模の違いがわかる。経営方式も瀘州では基本的に「前店後場」形式を取っていたのに対して、数口の窖しか持たない小さな工房が大半であり、大規模生産のための整備も必要なかったと考えられる。

4 計画経済時期(1949-1980年)の酒造業の変化と都市形成

1949年に中華人民共和国が建国され、計画経済が実施された。宜賓でも瀘州と同様に建国前には個人経営であった酒造工房が国有化され、現在の五粮液会社へと成長していく。

宜賓の場合、都市が僻地に位置していたこともあり、建国前には社会の混乱に乗じた匪賊の人災が長い時期続いた。そのため食糧の供給も不安定で、酒造業は致命的な打撃を受けた。1948年から半数の酒造工房の生産停止が余儀なくされた。1948年の時点で宜賓城内の酒造工房の数は14軒から7軒に減って、窖の数も140口余りから60-70口になった。そして1949年前後になるとほぼ全ての酒造工房が生産停止したと『五粮液志』は記載している^{注10)}。

建国後の1950年12月29日には「宜賓市大曲酒釀造工業連営社」(公私共営協同組合)が設立され、そして1952年5月に「国营第二十四酒場」が成立して、同年11月同酒場が当時宜賓市街内で一番大きかった「長發生」工房以外の酒造工房を買収し、「長發生」工房についてもレンタル形式で使用権を得た。こうして国有会社としての五粮液が誕生した。瀘州市の酒造業の国有化と比べて見ると、国有化にかかった期間が短く、過程も単純であったことが分かる。図4を見てみると、成立当初の五粮液会社は従業員26名、酒年間生産量100トンほどしかない小さな会社であった。そこから工場整備、規模拡大が行われるが、1980年以前の従業員数や生産量などの伸びはとても緩やかであった。

工場などの施設については、図5を見ると宜賓半島上ではA外北正街付近とB小北街の東側、C元北城壁付近、D走馬街の四ヶ

所に工場施設が分布していた。図4の生産量などから見て、基本的に昔の工房の施設を利用した生産であり、ほぼ拡張などもなかったと考えられる。走馬街の工場(表2の3と7番である元徳盛福、赵元兴工房)については、『五粮液志』の年表によると、1966年に金沙江が特大規模の洪水となり、走馬街の工場と南岸生産工場の一部が浸水し、大きな被害を受けたという。そして1967年には走馬街の工場の窖泥^{注11)}を全部南岸生産工場に移したと記載している^{注12)}。『五粮液志』と他の史料では走馬街の工場に関するその後の情報は無いが、現在その場所は1997年に成立した「四川景盛グループ徳盛福九粮醸酒株式会社」の工場になっていて、酒を生産している^{注13)}。ただし、「宜賓晩報」2013年の報道では「徳盛福工房の元にあった場所で再

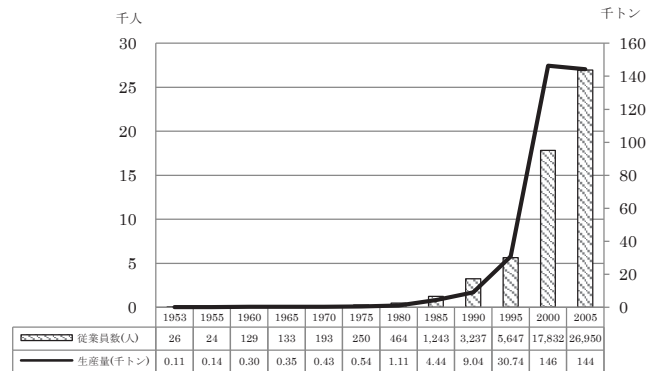


図4 五粮液生産量と従業員数変化図^{注14)}

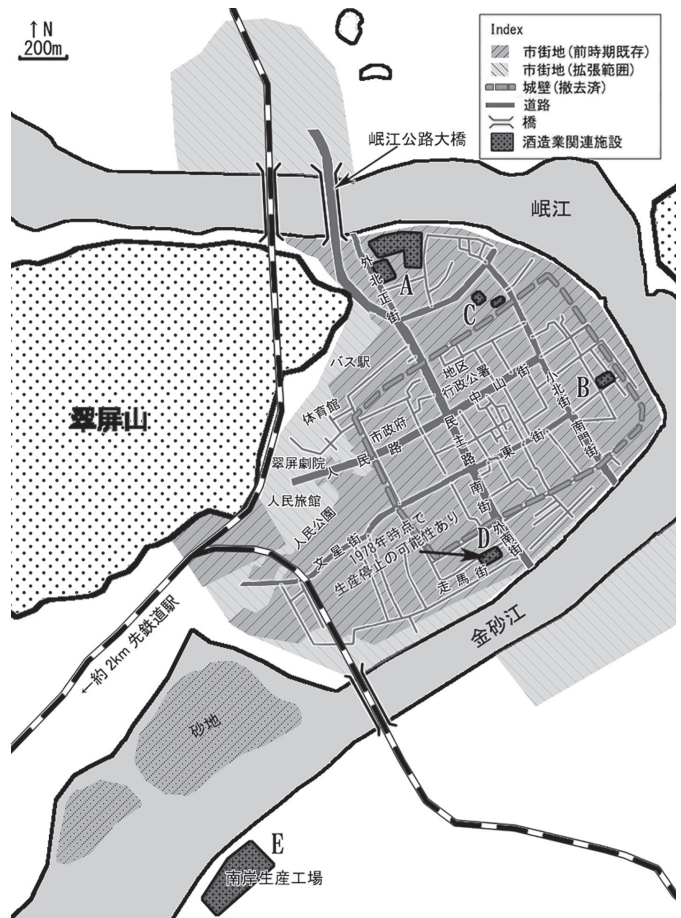


図5 1978年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注15)}

び酒を生産することは昔の醸造方法を伝承及び宜賓の酒文化の発展に大きな意味を持つ…(以下略) 注16)と書かれ、1967年から2013年の間、この工場は長い期間にわたり放置された可能性が高い。『五粮液志』の記載でも、当時の旧市街地の工場については以上の四ヶ所のみであり注17)、他の前近代に酒造工房があった場所には特に工場が建てられていなかったと考えられる。表2と照らし合わせて見ると、民国中後期から出現した規模の小さい工場の施設はほとんど継承されなかったことがわかる。原因としては元々窖の質(古い程度など)と生産停止によるダメージ(『五粮液志』の記述によると建国前は基本的に小規模の工房の方から生産停止していくのが一般的であった)などに影響されたと考えられる。

旧市街地以外では金沙江の対岸にも工場区(E 南岸生産工場)が建設されていたことが図5からわかる。南岸生産工場は国家が専用資金60万元(約1,110万円)を用いて、1960年から建設を始めたものである。計画用地は1.8万㎡、計画建築面積は約1.5万㎡であり、年間生産能力が500トンの建設計画であった。工場区には前工程生産施設(原酒生産施設)と後工程生産施設(瓶詰め、包装施設等)以外に従業員宿舎や食堂なども計画され、独立生産が可能な工場区計画であった注18)。しかしこの時期は中国の全国的な大災害と文化大革命が重なった時期であったため、建設には15年の時間が掛かった。1975年の時点で会社の酒の年間生産量は542トンであり、従業員は250人であった。

この時期の市街区については図5を見ると、建国後約30年を経過した状態だが、大規模な市街区拡大がなかったことがわかる。道路については民国時期に既に基本的な形ができていたので、旧宜賓城の範囲内ではそれほどの変化が見られなかった。城外の西では「人民路」が新設され、その周辺に市政府、人民公園、体育館、バス駅などの公共施設が建設され、都市の中心が西に移動していたことが窺える。そして旧宜賓城の北では、民国時期にもあった外北正街の隣に新しい道路が建設され、1973年に開通された「岷江公路大橋」を通じて岷江を渡れるようになった。「岷江公路大橋」は現在の宜賓市内で一番交通量の多い橋だが、1978年の時点では岷江の北岸の区域には小規模な市街地しかなく、商業施設などもほぼない状態であった。金沙江南岸についても小規模な市街地が展開し始めていたが、地図に記載されるほどの道路はまだ整備されていなかった。またこの時期は南岸生産工場も建設が完了していたが、工場区の周辺も市街地は形成されていない状態であった。

鉄道については、宜賓は四川省と貴州省を結ぶ鉄道線の重要な結節点ということで、1958年という比較的早い時期に鉄道が開通され、主に貨物乗り換えの駅として使用されていた注19)。ただし鉄道駅の位置と参考資料の元の地図には駅近辺で他の施設が全く描かれてなかったことから、宜賓市内の物資などを大量運出する役割は担っていなかったと考えられる。

5 市場経済時期(1980-現在)の酒造業の変化と都市形成

5.1 市場経済過渡期(1980-1992年)

1978年に改革開放政策が提出され、1980年には鄧小平が政策について演説を行い、具体的な方向性を決めた。五粮液会社の場合、市場経済時期に入っても、計画経済時期の制度が長く続いたと考えられる。『五粮液志』の従業員制度に関する記載によると、「(建国後

1992年まで(五粮液会社)は計画経済時期の従業員制度を実施した。やり方は企業が労働計画を作成し、政府が計画を確認した上で(政府機関である)労働部門に引き渡して、労働部門が事前計画した労働力に関

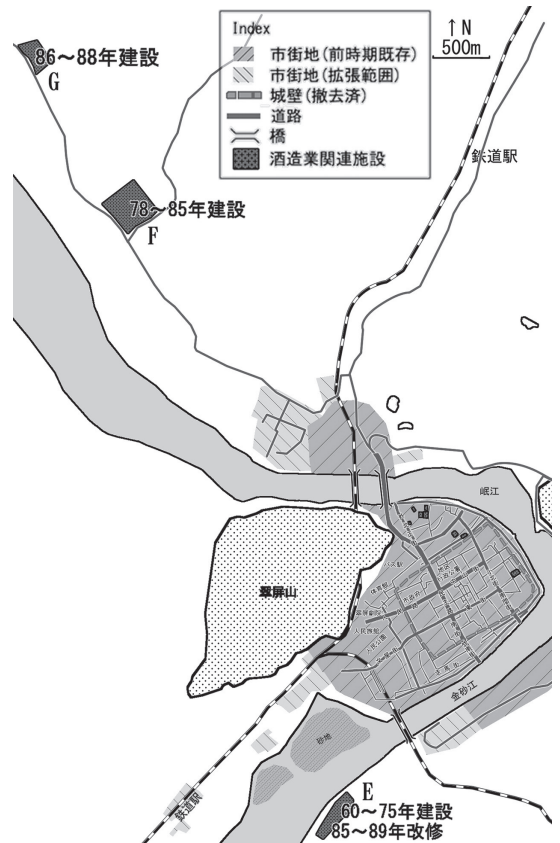


図6 1990年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図注20)

する全体計画と照らし合わせて、調整を行う。その後労働部門が労働力を募集・試験し、採用する。この制度の悪い所は労働部門が会社の実際の状況を考慮しなかったことである。例えば会社は酒を醸造する労働者を募集したい場合は、職種上男性しか適していないが、全体計画では必ず男女が一緒に仕事をする方針があるため、女性も酒を醸造する労働者として入社する。しかも会社は職位を調整する権利もなかったため、とても不便であった」という注21)。

従業員制度がそうであったように、市場経済過渡期では会社の資金管理制度、販売制度なども徐々に市場経済に適したものへ変わっていくが、工場建設は図6のように大規模に行っていた。

まずF岷江北岸に1978-1985年に建設された工場区の建設経緯は、会社が工場拡大計画を制定し、市の革命委員会(当時の人民代表大会の機構であり、同時に地方政府の権力を持つ組織でもある)がそれに同意し、約10万㎡の土地を会社に無償で与えるというものだった。この工場建設は1,008口の窖を新設し、その結果酒の生産能力が3,000トン増加した注22)。そしてG1986-1988年に建設された工場区については、国家計画経済委員会、商業部、そして四川省商業部が建設計画を承認し、国から建設資金を借りて建設したものである。土地については宜賓地方行政公署が土地徴用の許可を出した。徴用された土地の面積は17.3万㎡であった。建設投資額が1,812万元(約3.35億円)で、工場の面積は約7.6万㎡であった。それにより2,500トンの酒の生産能力が増えた注23)という。徴用された土地面積は実際の工場建設面積と比べて約10万㎡の余裕があると見える。

それ以外にも会社は自ら資金を集めて、E南岸工場の設備改造や博物館、従業員生活関連施設を建設すると共に、物資運送チームを設立したという。

FとGの二つの工場区の建設は現在の五粮液の岷江北岸にある超大規模工場団地の基礎になったものでもあるが、前述の建設経緯から見ると、国と自治体の行政や管理システムも変化していたことがわかる。会社の建設計画を許可した機構も全く異なったし、関わる機構の数も異なっていた。

そして工場区の建設位置についてだが、図6を見ると、南岸工場がそうであったように、岷江北岸にあるこの二つの工場区が中心市街地との距離が長いことが分かる。1978年の図5の市街地と対照して見ると、都市の郊外よりもさらに遠い場所に位置していた。『五粮液志』の土地徴用に関する記述でも、OO生産隊(当時の農村の末端組織^{注24)})の土地を徴用したという書き方であった。その建設は当時の政府側から見て、都市開発を行ったというよりは周辺農村の産業の育成或いは職場創出の目的で行われたと推測できる。

この時期の市街地は、旧城区と金砂江南岸では鉄道に沿って小規模に拡大し、岷江北岸では橋の建設により小規模な新市街地が形成されたが、1978年と比べて大きな変化はみとめられなかった。

5.2 市場経済適応期(1992-1998年)

1992年に会社の従業員制度などが大きな変革を迎え、五粮液会社は、更に早いスピードで拡大していくことになった。『五粮液志』では1992-1998年を会社の高速発展時期としている。この時期には基本的に会社が自ら資金を調達し、多くの建設を行った。原酒生産のための窖を新設するのはもちろんのこと、老窖会社と同じく包装にも力を入れて、製品ラインのランク別で6つの瓶詰め・包装工場区を新設した。1から2区は高級ラインの酒の瓶詰め・包装工場区で、3区はアルコール度数の低い製品の瓶詰め・包装工場区である。4、5区は下のラインの酒の瓶詰め・包装工場区で、毎年10万トン以上の製品の瓶詰め・包装に対応できる。6区は1997年に建設された瓶詰め・包装工場区であり、ハイエンドの製品専用の工場区であった^{注25)}。包装以外では電力供給施設、原料・水貯蔵施設、原酒の貯蔵施設及び他の生産サポート施設も整備された。この時期における『五

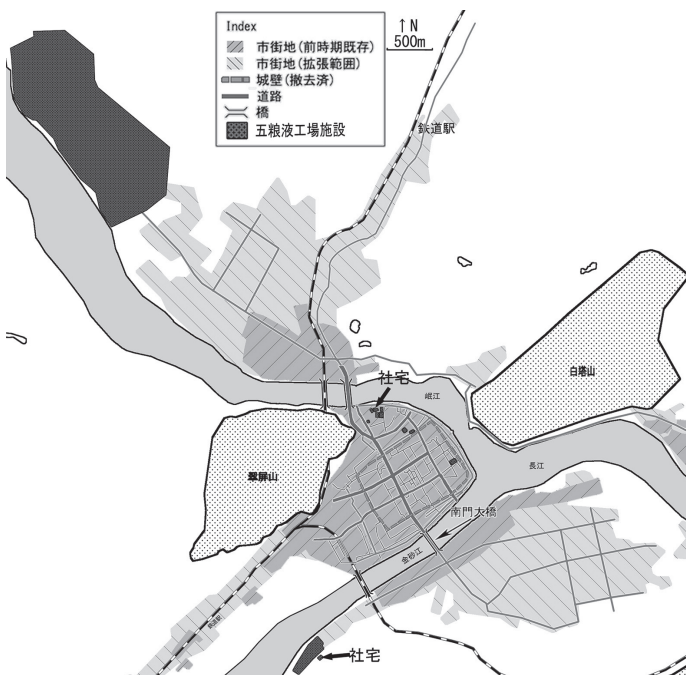


図7 1997年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注26)}

粮志』に明記された投入資金の合計額は約26億元(約482億円)であった^{注27)}。この時期の貨幣価値を加味すると瀘州で2006年から建設された「集中発展区域」の120億元(約2.2千億円)のプロジェクトにも劣らない規模と考えられる。しかし瀘州の方は四川省出資であったに対して、宜賓の五粮液の場合はほぼ全額会社が資金を調達した。この時期にほぼ自力でこれほどの資金を調達できた会社の経営には目を見張るものがある。

図7を見ると1997年の時点では岷江北岸の区域では既に旧市街地の大きさに匹敵するほどの大規模な工業団地ができていた。短期間でこれほどの建設ができたのは巨額の資金が確保できたこと以外に前時期に大規模な土地を入手できていたことも関係していると考えられる。これらの建設により、五粮液会社の生産能力とブランド力も確実に上昇し、1995年から20年連続で「中国の最もブランド価値のある商品ランキング」の食品業界での一位を占め続けている^{注28)}。

市街地についても大規模の拡張が見られた。宜賓半島の部分では鉄道に沿って市街地が形成された様子が見られる。また、旧市街地の西南側では1990年の地図で見られた砂地が消えている。この時期には川の改造工事や埋め立ての工事などが行われていたと考えられる。

金砂江南岸の部分では、1990年10月に開通した「南門大橋」により宜賓半島と金砂江南岸が便利に行き来できるようになって、新市街地も開発された。岷江北岸についても鉄道沿いと五粮液工業団地に向けて新しい市街地が展開している様子が見られる。

この時期には、宜賓の市街地は一気に拡大され、現在の宜賓市の

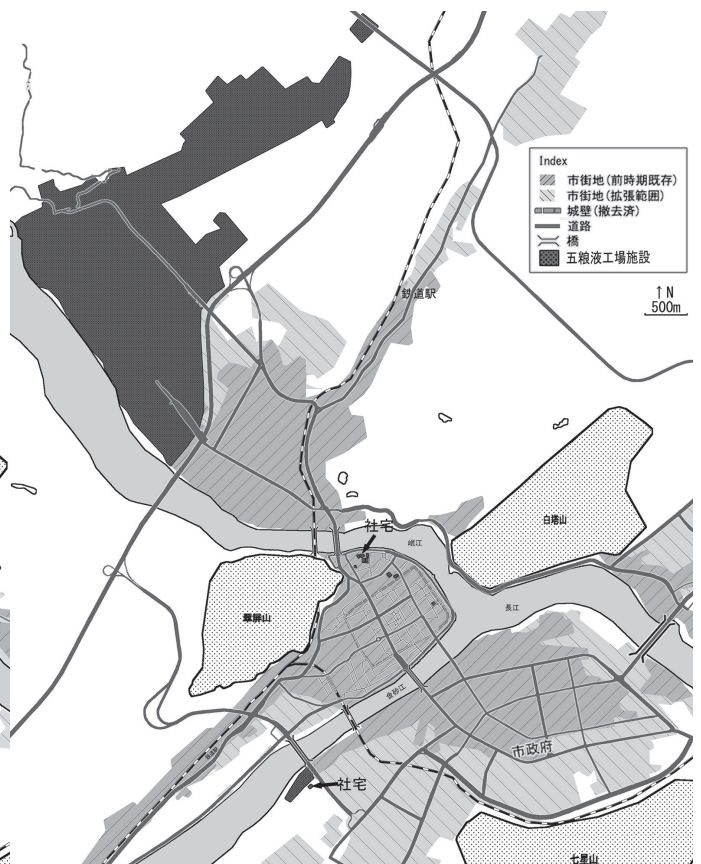


図8 2008年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注29)}

宜賓半島、(金沙江)南岸、(岷江)北岸からなる都市構造が形成された。そして北岸については工場以外の市街地の展開方向も工業団地の影響を受けたと考えられる。

5.3 市場経済進展期(1998年-現在)

1998年に五粮液会社は会社の制度を変更し、株式公開を行い、グループ会社となった。会社の正式名称も現在の「五粮液グループ株式会社」となり、更なる業務拡大が行われた。五粮液会社の株式化の時期は老窖会社の1994年と比べて遅い方であるが、1992年-1998年の五粮液会社の成長は凄まじく、ブランド価値ランキングでは1998年の株式会社化前にも既に当時株式会社化していた老窖会社より上であった。この株式会社化は会社の経営システムなどが市場経済に適応した結果ではあるが、実際には社会から発展するための資金を集めることが主な目的であった。老窖会社も上場を通じて資金を得、新会社本部や包装工場を整備したように、五粮液も「(会社は)上場により、豊富な資金を手に入れた。そして他の会社を買収・合併し、外部へ投資することで資本を増やすことに成功、会社の資産が更に大きくなった」^{注30)}と『五粮液志』は記している。

買収・合併した主な会社には元「宜賓市印刷総公司」など酒の包装など後工程でサポートする企業があるが、買収した後は会社自身の酒などの印刷だけに使うのではなく、更に設備などの整備に資金を投入し、印刷会社としての実力をつけ、全国から印刷オーダーを受けるようにしている。それ以外にも製薬会社や機械製造会社を買収し、印刷会社と同じような戦略を取っている^{注31)}。

この時期の五粮液会社は関連会社の買収・合併などを行っているが、酒造に関してももちろん大量の資金を投入し、生産能力の向上や技術の開発、従業員の生活施設の整備、工業団地の観光客向けの景観整備を行っていた。その結果、出来上がったのは図8で描かれている岷江北岸にある超巨大な工業団地であった。

この時期の市街地については旧市街地では宜賓半島南西にあった元砂地の部分に市街地が広がった様子が見られる。金沙江南岸でも大面積の新市街地が形成されていた。金沙江南岸の東半分は川と山を境界とする一帯が市街地でほぼ全部埋め尽くされた様子が見られる。また宜賓長江大橋が2002年に建設されたことも確認される。市政府は南岸の市街地の中心部に移設され、新中心市街地として機能し始めていることも窺える。この時期は五粮液会社の高速の発展時期であり、グループ化と株式公開により、宜賓市内の多くの会社を合併し、市の財政収入などの生命線を握るようになったと言える。

2008年以降にも五粮液会社は拡大し続けて、都市への影響力も強まる一方であった。図9を見てみると北岸にある五粮液的工業団地が更に拡張され、宜賓中心市街地に匹敵する規模になっている(写真1で映った部分は北岸工業団地の中心部にある山から南に眺望する風景で、画面に収まる施設の全てがこの工業団地のものである)。そして五粮液北区計画(2013-2030)を見てみると、更に北へ拡張する計画が立てられており、2013-2030年宜賓市全体計画でもその用地が明記されている。この時期の北岸工業団地は普通の工業団地と違い、一部は観光地として一般客に開放されているのが特徴であり、観光整備も行われている。そして団地内には会社が運営しているバスや団地内だけを走っているタクシー(宜賓市内のタクシーとは塗装で区別されている)などもある。その他団地内では従業員のための生活施設や商業施設もあり、観光客向けの酒を販売する商業施設もある。もちろん生産面か

ら見ても、入口に本社や酒の博物館、観光案内センターがあり、原酒生産などの前工程生産施設、瓶詰めや包装などの後工程生産施設、酒の瓶や化粧箱などの生産サポート施設、原酒や原料、水などを貯蔵する施設、電力などの施設も全部取り揃えられている。現在の北岸工業団地は独立可能な一つのまちとして成立していると言えよう。

市街地については、宜賓半島の西北部の川沿い部分が全部市街地で埋まった以外は、範囲上大きな変化は見られなかったが、酒造業に関する整備が数多く行われている。先ず図9の黒い線で囲まれた「酒都特色文化街区」(以下:特色街区)の正式名称は「酒都宜賓・五粮液文化特色街区」である。特色街区は宜賓市政府が出資し、市政府が建設・整備中の酒をテーマとした街区である。総投資額は約50億元(約925億円)であり、2010年から建設がはじまり、10年をかけて完成する計画である^{注32)}。図9でも見られるように、範囲内の一部は90年代以前に形成された市街地で、それらを纏めて区画整理し、再開発を行う



写真1 現在の五粮液北岸工業団地^{注33)}

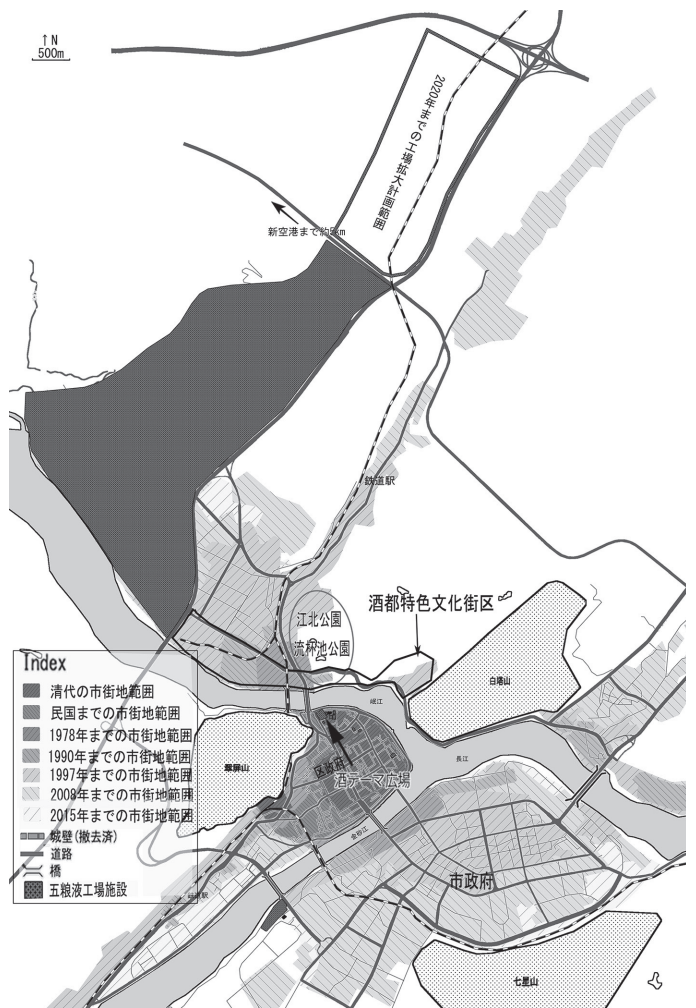


図9 2015年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注34)}

ものである。そして特色街区の建設に伴い、公園などの整備も行っている。図9の楕円で示している江北公園、流杯池公園などがそうである。これらの公園も酒をテーマとしていて、公園の壁などはまちの酒文化に関する彫刻などがなされている。そして宜賓市の新しい空港の建設プロジェクト申請も2012年に国務院に許可され、建設決定された^{注35)}。図9でも示したように、新空港は五粮液北岸工業団地から5km離れた所に建設されている。空港の正式名称は「宜賓五粮液空港」である。この空港の名前は中国でも特別であり、初めて企業の名前が入った都市の空港である。「五粮液空港」の名前についてはネット上などでも色んな議論を引き起こし、法律の専門家からも異論が出されている^{注36)}。空港の名前からでも明確に企業を宣伝する意図が見られたが、建設位置も北岸に近い場所が選ばれている。おそらく、空から北岸を眺められるようになるだろう。このように北岸の区域全体が酒をテーマとした都市計画の対象になっていると考えられる。以上のことから会社と都市の関係性が非常に強いと判断される。

空港や特色街区などを見ると、市政府が全力で企業を応援している様子にも見えるが、実際両者の間には軋轢もあると推定される。宜賓市都市計画局の事務室へのヒヤリング^{注37)}によると、市政府が北岸にある公園を整備する際に地下駐車場などの問題で揉めごとが発生したという。それ以外にも宜賓市全体計画要旨において「菜壩区画(元空港があった区画とその周辺)は空港移動のため、都市建設が終始開始できていない状況である」^{注38)}などの記述もあり、急速拡大していく企業の力と需要に市の方では諸々の困惑があるとも見られる。

6. 宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

全体として、宜賓において五粮液会社は70年代から当時農村部にあった工場区を段階的に

拡大させた。現在の北岸にある大規模工業団地が形成される一方で、旧市街地と南岸では工場の移転がほぼなく、小規模でもそのまま使用し続けるような工場構成になっている。

冒頭の表1では企業と都市のデータを割合で示した指標を用いて、現在の酒造会社と所在都市の関係性を瀘州が軽度、宜賓が中度と評価した。この数字データから見て五粮液会社は経済、従業員数、工場区域面積の全ての面において都市に対して、瀘州の老窖会社より強い力を持っていることがわかり、これまでの産業の近代化と都市形成の累積的結果とも言えよう。

宜賓は中度と評価しているが、それは会社と都市の関係性が強くないという意味ではなく、表1で取り上げた茅台鎮のようなデータで示せる各方面でほぼ完全に1つの産業により成り立っているような都市に対して関係性が一段階下を表している。瀘州は宜賓と比べてデータ上もう一段階下の評価になったが、前稿を通じてわかった

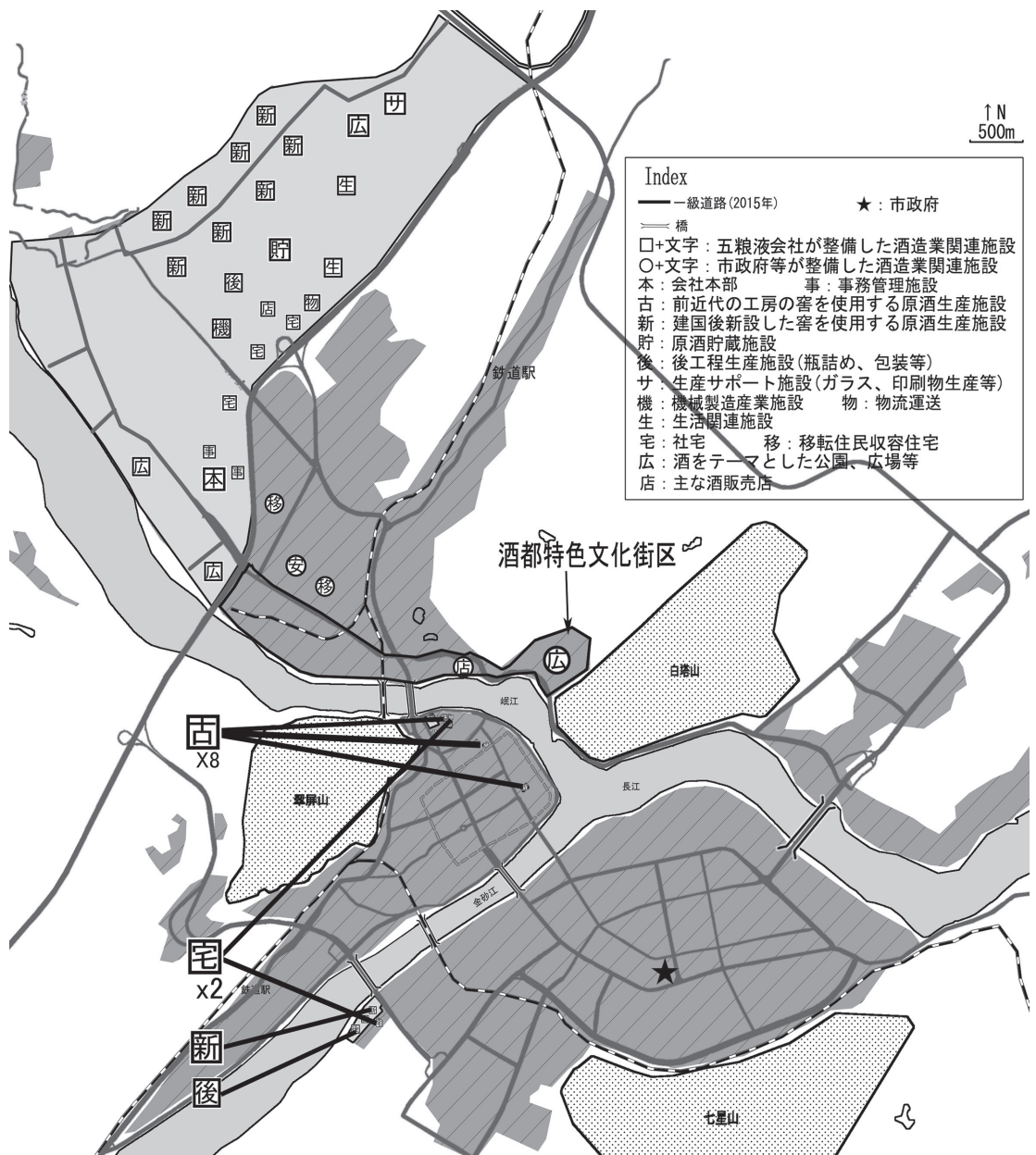


図10 宜賓市酒造業関連施設配置図^{注39)}

表3 瀘州、宜賓主要工場施設と市街地整備比較一覧表^{注40)}

都市時期		瀘州	宜賓
市場萌芽期		建国前の最盛期酒造業規模	甯113口
計画経済時期(1949-1979年)	一社化された国有会社の成立時間	1960年	1952年
	主な工場建設整備内容(建設時期;出資方;出資額;建設当時の用地区域)	基本的に建国前の酒造工房を元に工場改造(50-70年代末;国家出資;額不明;中心市街地、都市周辺部)	建国前の酒造工房を元に小規模な工場改造と南岸工場の建設(1960-1975年;国家出資;60万円;周辺農村部)
市場経済時期(1980-現在)	過渡期	主な工場建設整備内容	北岸工場区1(図6「F」);1978-85年;推定地方政府出資;額不明;周辺農村部)と北岸工場区2(図6「G」);1986-88年;国の融資;1,812万円;周辺農村部)を建設
		会社株式化の時	1998年(株式化と同時にグループ化)
	適応期	主な工場建設整備内容	包装工場を中心に電力供給施設、原料・水貯蔵施設、原酒の貯蔵施設など、北岸工場区を拡張(1992-98年;会社出資;約26億元;都市周辺部)
		大きな市街地整備など(時期;整備主体)	金砂江南岸新中心市街地形成、岷江北岸では工業区域以外の市街地も拡張開始(90年代後半;市政府)
進展期	主な工場建設整備内容	主に北岸工場区の変更新の大規模化(1998年-現在;2005年まで合計投資約87億元、その後記載なし;会社出資;新市街区域)	
	大きな市街地整備など	岷江北岸で大規模な酒をテーマとした市街地再開発、北岸工場区域の付近に新空港を建設(2010年以降;市政府)	

ように都市の道路網、観光、景観整備、農業など多くの面で強い繋がりがあり、関係性も弱いわけではない。そして瀘州と宜賓でそのような段階的な差の形成原因とそれによって生じた都市産業構造の違いを分析してみよう。

表3でも分かるように、建国前の酒造業規模はむしろ瀘州の方が圧倒的に大きかった。しかし計画経済時期では経済システムなどの原因で都市、産業共に大きな拡大はなかった。市場経済への過渡期では両会社ともに工程に対応する工場を建設したが、その時期の会社の経営自由度はまだ低く、建設資金も基本的に政府によるものであったと見える。そして適応期になると市場経済が中国で普及し、多くの産業は空前の発展機会を得られた。白酒は贈答品などとしての性質もあるため、この時期両会社ともに多くの資金を包装工場の建設に投入した。ここで五粮液会社は経営手腕を見せ^{注41)}、業界一に到達する急成長を遂げたが、老窖会社は上場で得られた資金を投入したとはいえ、同時期に工場建設などに使った資金は五粮液会社に及ばなかった。またこの時期は都市が急激に拡大した時期でもあるが、瀘州の新中心市街地が90年代前半に形成されたのに対して、宜賓は90年代後半である。産業による税金提供の面からみて、都市拡大の資金も五粮液の方が多く提供したと推測できる。それにより都市建設に対する発言力が非常に強くなったと考えられる。進展期では都市と産業はもう一段階飛躍的な拡大があり、現在の都市産業構造を決定するものでもあるが、前時期より形成された産業と都市の関係性が働き、宜賓は会社の資本を利用し、会社にとって効率のいい区域での工場拡大ができた。瀘州は政府の出資を頼り生産施設などを都市の中で分散的に建設した。この両都市の産業と都市の関係性強度により、瀘州では企業側が生産施設などを都市の中で分散的に建設し、市内で分業生産を行なう形となった。工場区を連結する道路など他の必要なインフラは市政府側が整備し、企業の副次的な施設を郊外化するような「都市全体展開型」の構造が形成さ

れているといえよう。

それに対して、宜賓の空間構造は、企業側が都市空間の一部に強い支配権を持ち、中心市街地へと繋がる道路の一部を

企業が整備すると共に、関連施設などは全て、企業が支配権を持つその一部の都市空間の中で一番有効な所に配置するというものである。都市内の一郭に独立した都市のような空間を形成する「都市内都市型」と呼ぶことが出来ると考えられる。会社と都市の関係性が瀘州と比べて強いから可能となった形でもある。

中国の現代都市の形成においては、計画経済から市場経済に変化、適応する時期が極めて重要であると考えられる。その時期には産業も都市も爆発的に成長できる機会に恵まれ、そしてその滑り出しによって、両者の関係性が大方決定される。宜賓の場合は都市が大規模拡大する前に企業が著しく成長できたため、その後の都市の建設などに並外れた影響を与えたと考えられる。

以上述べたように、企業の発展時期、企業と市政府の力のバランス、国の政策などの原因により、宜賓市の現在の都市構造が形成されたが、会社の強権により、強引に進む面もあり、会社と都市(地方政府)の間にはある程度緊張した雰囲気が漂う状況でもある。

現在業界2位である茅台会社の本拠地である茅台鎮については、実は宜賓よりさらに強い影響が見られるが、これについては別稿で検討することとしたい。

瀘州:都市全体展開型

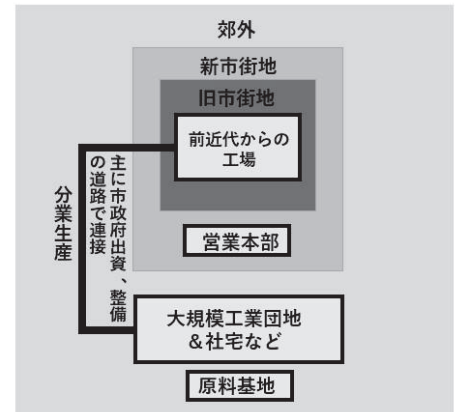


図11 瀘州市における都市と産業の空間的關係図

宜賓:都市内都市型

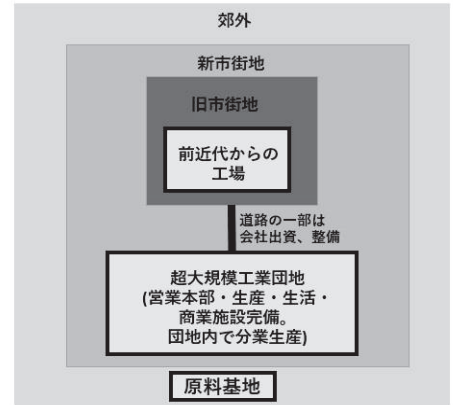


図12 宜賓市における都市と産業の空間的關係図

付記

本論文は、日本学術振興会・平成 27～29 年度科学研究費「在来産業の近代化と都市形成の対応に関する日中比較研究」（挑戦的萌芽研究、課題番号：15K14094、研究代表者：藤川昌樹）による成果の一部である。

参考文献

- 1) 曾天然、藤川昌樹：中国四川省瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係，日本建築学会計画系論文集 80, 712, pp1295～1305, 2015. 6
- 2) 《五糧液志》編委会：五糧液志，四川科学技术出版社，2011
- 3) 宜宾市地方志办公室：宜宾市志，新华出版社，1992
- 4) 凌受勋：宜宾酒文化史，中国文联出版社，2012
- 5) 前瞻産業研究院：中国白酒業界市場需求投資戰略規劃分析レポート，2015
- 6) 株式会社業績公開資料：瀘州老窖株式会社 2014 年年度報告，2015
- 7) 株式会社業績公開資料：宜賓五糧液株式会社 2014 年年度報告，2015
- 8) 株式会社業績公開資料：貴州茅台酒株式会社 2014 年年度報告，2015
- 9) 史志志办公室修編：戎城史志，1988
- 10) 宜宾城街区图志編纂办公室：宜宾城街区图志，2009，四川科学技术出版社
- 11) 宜宾市政府：宜宾市全体計画要旨（2013-2030）

注

- 注 1) 2014 年のデータ。会社資産総額と営業収益及び従業員数は参考文献 6, p8, 48, 参考文献 7, p7, 34, 参考文献 8, p4, 31 により。都市 GDP は宜宾市統計局，「2014 年宜宾市主要經濟指標および四川省 GDP 千億クラブの比較分析」による，2015. 2. 4, 社有地と都市の主な市街地の面積は Google マップの航空写真データ（2014 年）をベースに図上計測を行い、概略的に算出したものである。
- 注 2) ランキング順位は参考文献 5, p9 を参考。
- 注 3) Google 地図 2015 年航空写真を基図に、「光緒 21 年宜賓城図」、現地調査のデータにより作成。
- 注 4) 台湾国史館所蔵「宜賓縣城廂図」（1948 年）を元図に作成。
- 注 5) 参考文献 2) 4) 9) の記載により整理作成。
- 注 6) 「真武山道教建築群」、国家重要文化財、文化財の紹介文によると主な建物は明万曆元年（1573 年）に建てられた。
- 注 7) 参考文献 10) p9。
- 注 8) 参考文献 2) p76。
- 注 9) 参考文献 2) p76。
- 注 10) 参考文献 2) p90。
- 注 11) 窖の中にある泥は酒の原料を発酵される微生物が生存する場所であり、酒の生産上とても重要なものである。
- 注 12) 参考文献 2) p21。
- 注 13) 四川景盛グループ德盛福九糧醸酒株式会社の hp「<http://deshengfu.1688.com/page/creditdetail.htm?spm=a2615.2177701.0.0.TiDVm0>」を参照、アクセス日 2015. 9. 30。
- 注 14) 参考文献 2) p224 を参照して作成、小数点後は四捨五入。
- 注 15) 宜宾市档案馆所蔵「1978 年宜宾市街区図」、参考文献 2、現地調査の情報より作成。
- 注 16) 「宜賓晚報」，「宜賓非遺 活在宜賓」の記事の一部を日本語訳，「http://ybw. newssc. org/html/2013-09/09/content_1919872. htm」，アクセス日 2015. 9. 30。
- 注 17) 参考文献 2) p19。
- 注 18) 参考文献 2) p104-107。
- 注 19) 参考文献 10) p252-253。
- 注 20) 宜宾市共産青年団事務局檔案室所蔵「1990 年宜宾市地図」、参考文献 2、現地調査の情報より作成。
- 注 21) 参考文献 2) p204。
- 注 22) 参考文献 2) p22, p107 を参考。
- 注 23) 参考文献 2) p25, p107 を参考。
- 注 24) 生産大隊とは 1958 年から実施された農村人民公社時期に存在する農村の末端組織である。人民公社制度の実施前は「行政村」であった。大隊は直接農民の管理を行つたため、この時期の農民は独立した資産や生産工具などはなかったとされている。
- 注 25) 参考文献 2) p109-111 を参考。
- 注 26) 1997 年「宜宾市全体計画現状図」、参考文献 2)、現地調査の情報より作成。
- 注 27) 参考文献 2) p109-111 を参考。
- 注 28) 中国經營新聞，2014，「五糧液のブランド価値が 735 億元突破、20 年連

続食品業界で一位」の記事による、

「http://news.cb.com.cn/html/company_11_20740_1.html」アクセス日 2015. 10. 1。

- 注 29) 2013 年「宜宾市全体計画要旨」p63, 2008 年中心市街地範圍を参考、その他参考文献 2)、現地調査などの情報より作成。
- 注 30) 参考文献 2) p111 より引用。
- 注 31) 参考文献 2) p111-114 を参考。
- 注 32) 「酒都宜賓・五糧液文化特色街区計画書」、華西都市報，「五糧液文化特色街区建設開始」の報道「http://www.wccdaily.com.cn/epaper/hxdsb/html/2010-09/20/content_236851.htm」を参考、アクセス日，2015. 10. 3。
- 注 33) 2013 年 8 月、筆者撮影。
- 注 34) 図 5, 8, 9, 10 の参考資料、BAIDU 地図(2015)のデータ、2013 年宜宾市全体計画要旨、五糧液北区計画図、酒都宜賓・五糧液文化特色街区計画図、現地調査の情報より作成。
- 注 35) 新華ネット，2012，「「四川宜賓空港が建設許可、名前は「五糧液空港」」」の記事を参考，「http://news.xinhuanet.com/yuqing/2012-05/24/c_123182662.htm」，アクセス日，2015. 10. 5。
- 注 36) 歐陽クンクン：公共施設企業の名義を使用することの根拠と法律規制について＝「五糧液空港」の企業の名義を使用することから，2013. 1, 上海政法学院報，28 卷第 1 期などの関連論文がある。
- 注 37) ヒヤリング時間は 2013 年 8 月。
- 注 38) 参考文献 11) p62。
- 注 39) 図 9 の参考資料(注 35)、会社、市都市計画局のヒヤリングの情報より作成。
- 注 40) 前稿及び前文の出自を参照。
- 注 41) この時期の五糧液会社の経営システム改革及び経営手法などについて、典型的成功事例として“中国企业成功之道”五糧液案例研究組編著：五糧液成功之道，2011，机械工业出版社などの經濟管理類の著作に取り上げられている。

THE RELATIONSHIP BETWEEN THE WHITE SPIRIT INDUSTRY MODERNIZATION AND THE CITY FORMATION IN YIBIN, CHINA

Tianran ZENG * and *Masaki FUJIKAWA* **

* Postdoc, School of Architecture, South China Univ. of Technology
The Univ. of Tsukuba, Dr.Eng.

** Prof., Faculty of P.P.S., Univ. of Tsukuba, Dr.Eng.

In order to understand the differences between company towns, this paper focused on the relationship between a brewing company and a city. Three kind of data, the ratio of the company's profit in Yibin's GDP, the company's employees in Yibin's total population, and the company's lands in Yibin's area, were used as evaluating indexes to analyze the relationship between the enterprise and the city from the economy, population and urban space aspects.

Specialized brewing studios showed up in the Ming Dynasty in Yibin. After the establishment of the People's Chinese Republic of China, these studios were combined to one national company, and a rapid industrial expansion was realized after the Reform and Open Up. In the 1990s, the company went public and purchased some related companies with a large sum of capital. As a result, a production chain has been fully established.

If looking at the urban space, it will be found that the factories were mainly constructed in the countryside, along the northern riverbank before the 1980s. After 1990, as the number of the employees increased to 17,832, a city-sized factory housing complex was built. In addition, in order to create a convenient transportation system for the products, the company also paved some main roads connected to the city center.

Comparing with Luzhou, Yibin has a similar general flow of the industrial modernization. The difference is that in Yibin, the company caught the chance of the system reform in the 1990s. It purchased some related enterprises within the city, by raising a large sum of funds independently before the rapid urban expansion. This is the biggest reason for evaluating the relationship of the enterprise and the city as moderate.

As a conclusion, in Yibin, the enterprise constructed housing complexes, city infrastructures, and has formed a separated urban space within the city, therefore, it can be classified as "A City Within A City" company town. This structure has been formed due to the balance of the enterprise and the city government, the national polices and so on.

(2016年5月10日原稿受理, 2016年10月25日採用決定)